

Title	私の鈴木公雄論(1)
Sub Title	
Author	安藤, 広道(Ando, Hiromichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2006
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.74, No.4 (2006. 3) ,p.113(433)- 123(443)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	鈴木公雄名誉教授追悼記念講演会講演録
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060300-0114">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060300-0114</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 鈴木公雄名誉教授追悼記念講演会講演録

### 鈴木公雄名誉教授著作目録

慶應義塾大学および考古学、歴史学界において、きわめて大きく多様な足跡を残こした鈴木公雄氏は、壮絶な闘病生活の末に、二〇〇四（平成一六）年一〇月他界された。同氏は、本塾を卒業後若くして助手として勤務、その後四〇年の長きにわたり文学部において研究と教育に極めて熱心に携わってこられた。研究、教育のいずれの面においても、その手法は斬新かつ独創的なものであり、多くの学生・後進が慕い薫陶を得た。

また、学界においても同氏の打ち立てた、先史考古学、歴史考古学上の数々の業績に対する評価は極めて高いものばかりであった。ことに、縄文時代の土器、貝塚などに関する研究は、海外でも高い評価を得、氏の著した考古学の概説書は、隣国でも翻訳されて今日なお多くの読者をもつ。さらに、晩年に全力を打ち注がれた出土銭貨に関する歴史考古学的研究は、ユニークな研究スタイルによって新たな境地に上り詰め、熟成の域にかかっていた。しかし、その道半ばにして逝かれたことは、はなはだ無念であり、誰よりもご本人が悔やまれたことであろう。文学部民族学考古学専攻では、そうした鈴木公雄氏の研究と教育の跡を辿り、氏の冥福を祈ろうと、ご命日にあたる昨二〇〇

五年一〇月二十二日「鈴木公雄名誉教授追悼記念講演会」を企画、開催した。ここでは、氏にゆかりの後進・縁者三名による「私の鈴木公雄論」が公開講演された。

鈴木公雄氏が、文学部内の旧史学科において長く活躍されたこと、さらに当三田史学会での発表・著述のみならず、会の運営にも大きく貢献されていた点にも鑑み、ここに当日の講演録、および氏の著作目録を掲載させていただく次第である。

（民族学考古学専攻・阿部祥人）

### 私の鈴木公雄論①

安藤広道

はじめに

今年の六月二十二日に、鈴木先生の最後の著作、『考古学はどんな学問か』が出版されました。この本は、先生ご本人が企画されたもので、私も論文の選定の段階から一部お手伝いをさせていただけおりました。先生は、この本の出版を見ることなく、昨年の今日、他界されましたが、八月に先生が入院される前に、掲載論文がほぼ決まっておりましたし、書き下ろしの原稿も揃っていましたので、残された我々も、それほど大きな苦勞なく出版までこぎつけることができました。

先生は、この本の出版に、特別な思いを抱かれていたようです。この本が、ただの著作集ではなく、あるしつかりとした目的をもって編まれたものであるということは、「あとがき」を

読んでいただければ、とてもよく判っていただけだと思います。先生は、現在の考古学が抱えるさまざまな問題を見据え、本来、考古学はどんな学問なのか、あるいはどうあるべきかを、ご自身の書かれた具体的な研究を通して、語ろうとしていたわけです。巻末の「あとがき」は、先生の絶筆となった文章で、入院の直前に書かれたものです。先生が、考古学という学問をどのように考えてきたかが、短い文章の中にしつかりと詰まった、とてもいい文章だと思っています。

私は、この本の準備からお手伝いをさせていただき、鈴木先生の考古学について、改めて考える機会をいただきました。去年の夏の短い期間でしたけれども、先生の論文・著作をめぐり、先生と直接お話しすることもできました。また、先生が亡くなられた後も、奥様から先生の学問に対する姿勢・思いをうかがうことができました。これからお話しすることは、こうしたこの一年ちよつとの間で、私自身が改めて思い描くようになった、鈴木先生の考古学、鈴木考古学に対するイメージです。もとより、私は、ここにいらつしやる先輩方に比べれば、鈴木先生とのお付き合いが特別長かったわけではありません。また、研究対象も鈴木先生とは異なっていましたので、鈴木先生の論文・著作についての理解に足りない部分があることは否定できないと思います。したがって、皆さんがお持ちになつてゐる鈴木先生の考古学についてのご意見と、必ずしも同じ方向を向いていないかも知れませんが、ひとまずは「私の鈴木公雄論」というタイトルに免じて、お許しただければ幸いです。

一・鈴木先生との出会いと私の研究人生

さて、私がイメージする鈴木考古学の特徴について、これからお話ししたいと思います。最初に、少し昔話をさせてください。私の鈴木先生との出会いと、私が鈴木先生のご専門から外れて、弥生時代を研究するようになった経緯についてです。

私が鈴木先生の名前を最初に知ったのは、高校二年生のころでした。当時私は、すでに大学で考古学を勉強しようとして決まていましたし、考古学専攻のある大学に進学するために、受験勉強も始めていました。受験する大学の候補に慶應も含めていたと思います。そんな折に、確か川崎市の図書館で、『日本考古学を学ぶ』という本を借りたんですね。その第三巻に、「縄文時代論」という論文を書かれていたのが、鈴木先生だったわけです。

私は、いわゆる考古少年でしたので、中学生くらいから、考古学と名のつく本をいろいろと借りて読んでいたんです。その当時、縄文時代についての概説というと、単行本になつてゐるものの多くは縄文土器のはなしが中心でありました。というより、それ以外の集落研究などは、原始共産制云々といった、とても中学生・高校生には理解できないものでしたので、自然と縄文土器関係の文章を読む機会が多くなつていたわけです。私自身、縄文土器の解説を読むのは嫌いではありませんでしたし、博物館や資料館には、そうした土器がたくさん並べられていまから、大学に行ったら、縄文土器について研究をしたい、と漠然と思うようになっていました。

ところが、鈴木先生の「縄文時代論」には、縄文土器の話が出てこない。そこで述べられていたのは、縄文農耕論の問題から始まり、さけ・ます論、そして縄文時代の食糧構成全体に及ぶ、食糧生産と消費の問題だったわけです。この論文を読んだ時の印象は強烈なものでした。その内容がとても判りやすかったということもありますが、何しろそれまで私の頭の中では、縄文時代といえば、目の前にある縄文土器と住居址や貝塚の姿でしかなかったわけです。博物館には炭化した木の実なども展示されていていましたが、食糧に関する具体的なイメージなど、まるで頭の中に形成されていなかったんですね。はじめて、縄文時代の人々の生活というものへの興味が湧いてきたわけです。こんな縄文時代の研究があったのかと、とても大きな衝撃を受けたことを記憶しております。生業の研究が、学生時代以来、私の研究の一つの柱になっているのですが、その根っこは、この「縄文時代論」にあるわけです。

それ以後、慶應が、私の第一志望になりました。そして、何とか運よく合格することができまして、三田に進むことを夢見ながら、日吉に通っていたんですね。ところが、この年に、私の人生を変えた、もう一つの本に出会うことになりました。

その本は、当時岡山大学にいらっしやった近藤義郎先生の『前方後円墳の時代』でした。一九八三年四月、私が日吉に通り始めたころに出版された本です。偶然、生協で見つけてパラパラと最初のあたりのページをめくった時、直感的にこの本は読まなきゃいかん、と感じたのを覚えています。冒頭で近藤先

生は、雄弁な文献史の成果に頼らず、考古学がその独自の資料のみを使って歴史を復元・再構築できるかを自分自身で検証するためにこの本を書いた、と強調されています。その目的のため、ご自身で調査された遺跡の分析を中心に、私が好きになっていた食糧生産の話も踏まえ、弥生時代・古墳時代の社会の変化を体系的・論理的に描き出すことに成功しています。とてつもない労作で、私は、すっかり魅了されてしまいました。弥生時代・古墳時代への関心が、この時以来、とても強くなったのです。

ただ、一年生の私には、縄文時代の研究をしたくて慶應に来たけれども、弥生時代・古墳時代の研究者がいない民族学考古学専攻で、果たして弥生時代・古墳時代の研究ができるのか、という点が、とても心配になってしまったんですね。もちろん、そんな心配は無用だったわけですが、一年生の私には、とてもそのことが気がかりだったわけです。

ところが、二年生になって、民考の一員となり、鈴木先生のゼミに出席したとき、私の心配は、一気に晴れることになりました。何と、鈴木先生が、ゼミの二・三年生の輪読テキストに、近藤先生の『前方後円墳の時代』を選んでくださったのです。

先生は、近藤先生の論文を昔からかなり読んでいらっしやったようで、『前方後円墳の時代』以前の論文との対比なども行いながら、近藤先生の資料の分析方法から唯物史観に基礎を置いたその解釈まで、丁寧に解説してくださいました。この時点で、弥生時代の研究者としての、私の人生が決まったわけです。つ

まり、慶應に来ることになったキツカケが鈴木先生で、弥生時代研究者としての道を選ぶ、最後の一押しをしてくださったのも、鈴木先生ということになるわけです。

## 二、鈴木先生から受けた指導

どうして、はじめにこんな話をしたかといいますと、実は、鈴木考古学の特徴を理解するのに、何故、鈴木先生が『前方後円墳の時代』を選んだのか、という点が、大きなヒントになるのではないかと思つたからです。もちろん、その時の三年生には、菅沼さんや船木さんといった弥生時代・古墳時代を勉強している方々がいらつしやいまして、そのことが大きな理由だったことは疑いありません。しかし鈴木先生が『前方後円墳の時代』以前から、近藤先生の学問に関心をお持ちだったことは間違ひありませんので、まずは、この点を、鈴木考古学を理解する、一つの切り口にしてみようと思つたわけです。

『前方後円墳の時代』に限らず、近藤先生の研究の特徴は、自身の調査した考古資料の分析をとても大事にしていること、そして、そこで得られた分析結果の上に、主にマルクス主義的唯物史観を理論的柱とした解釈の世界を構築するという点にあります。また、ここでは、考古資料を分析する方法や歴史理論についての考察が、具体的な研究とともに進められているという特徴もあります。近藤先生の研究は、何を明らかにしたいのかという問題設定と、それが歴史研究にとってどのような意味があるのかという研究目的が明確であり、そうした目的を達成

するためには、どのような遺跡を調査し、そこで得られた資料をどのように分析すればいいのか、という調査・研究の方法論が、非常にはつきりと書かれています。

鈴木先生には、近藤先生の論文のほかにも、大阪大学の都出比呂志先生の論文なども読んでおけ、と勧められることもありましたが、私自身も先生から直接うかがつたことはありませんし、もしかすると、この中には意外と思われる方がいらつしやるかもしれませんが、鈴木先生が、マルクス主義に関心をもち、よく勉強されていたことは間違ひないと思います。それは、例えば先生の修士論文等の記述にも見え隠れしています。もちろん、先生は、先生の学生時代に一斉を風靡していたバリバリの史的唯物論の教条的な適用に惹かれることはありませんでした。寧ろ当時としては実証主義的と言われて批判されることもあつた、近藤先生をはじめとする方々の、具体的な資料の分析を重視した仕事を高く評価されていたようです。つまり、鈴木先生のマルクス主義への関心の根っこが、当時流行っていた、史的唯物論をめぐる理論的側面の議論にあつたのではなく、一部の考古学者が行つていた、考古資料の具体的な分析と、その結果を解釈する枠組みの理論的検討を一体的なものとして捉える、研究の組み立て方にあつたということをうかがい知ることができるところです。

学部生のころ、鈴木先生からは、考古学以外にも、幾つかの本を読むように勧められました。今、思い返してみると、その多くは、近藤先生のように、はつきりした目的意識をもち、方

法論や歴史理論の議論をしっかりと行いつつ、具体的な資料の分析を進め、体系的・論理的に歴史を語るという方向性を持った方々のお仕事だったように思います。一例を挙げると、鈴木先生は、柳田国男の著作も随分読み込まれていたようで、中でも、『日本の祭り』を名著だとおっしゃっておられました。鈴木先生が『日本の祭り』のどこに惹かれていたのかは、ついにかがうことができませんでしたが、柳田国男は、そのなかで、地域地域の祭りのあり方を見渡しながら、その比較を通じて日本の祭りの変遷過程を推測していきます。そうして明らかになった日本の祭りの本質・伝統と、現在に生きる人々がどのように向き合うべきかという、歴史観に関わる大きな問題にまで話が膨らみます。やはり個々の資料と、その分析方法、歴史観や歴史研究の目的といったものに、真摯に向き合っている点、そこに鈴木先生が惹かれたのではないかと思うわけです。

### 三、鈴木先生の研究の組み立て方

鈴木先生の論文や著作を読んでいると、同じように、個々の考古資料と、その分析方法、そして分析結果をもとに歴史を語るための理論的基盤を、とても重視されているように思えます。それも、それぞれを独立したものとして考えるのではなく、常にそれぞれの関係性を視野に入れた研究姿勢が明確です。歴史学は考古学を含めて、その学問を構成する諸要素、つまり資料やデータと、歴史に対する解釈や検討を行う思考との間につきまぎ出される対話なのだ、と先生は常におっしゃっておられました。

た。考古資料の分析を通じて得られたパターンの提示まではしっかりとやるけれども、それ以降のことは夢物語になってしまふような書き方や、逆に考古資料の分析から遊離した、方法論や歴史理論についての空中戦的議論に労力を費やすということもしていません。鈴木先生は当然欧米の考古学にも精通しておられました。ニューアーケオロジーをはじめ、欧米で話題になった急進的な理論を導入して、真新しさに訴えるようなことも決してしようとはしていません。

一方で、資料の分析方法に関しては、自然科学的手法の重要性を早くから強調し、積極的に導入していかうとする柔軟性も持ちました。つまり、先生は、主に日本の先史時代を中心とした、それまでの歴史研究を批判的に見つめ直し、今、こういった問題に取り組むべきかという研究目的を明確にする。そしてそのためにはどのような資料をどのような方法で分析する必要があるのか、そしてその分析結果をどのような理論的背景から解釈すべきなのか、という点を、広い視野のもとで整理しながら研究を進めていたということです。

先生は、若いころから方法論に関する論文を多数お書きになっています。これはある研究領域に打って出る際に、自己の立場をある程度明確にしておくための決意表明的な意図があつたこと、と先生は回想されておられました。先生が本格的に学会にデビューしたころ、先生は、縄文時代晩期の土器編年研究を中心に論文を発表されてきました。それ以来、先生は縄文時代研究者として名前が知られるようになるわけですが、

実は、この縄文土器の編年研究は、自分から進んではじめたというよりは、清水潤三先生を中心に進められていた、関東東部の貝塚調査が進む中で、やらざるを得なくなったというのが実情のようです。しかし、やってみると面白くなってきた、とおっしゃっていましたが、そこで先生は、それまでの縄文土器編年の研究史を批判的に検討し、既存の方法を教条的に適用するだけでは、現状の問題点を打破できないと感じたのだと思います。

当時、縄文土器の編年研究と言えば、山内清男氏の研究方法によって、縄文土器の編年体系が、大きな枠組みとして完成されようとしていました。鈴木先生にとっては、山内氏の研究を高く評価しつつも、自身で土器の編年研究を行う際には、山内氏の研究方法に欠けている部分、あるいは充分考慮されていなかった部分を整理することが必要だったのです。実は、先生は、こうした土器編年を行う際の方法論についての検討を進めたことにより、すぐに土器型式とは一体何なのか、そしてそれを生み出していった社会や人々の関係性は、どのようなものだったのか、という問題にぶち当たります。その結果、先生の研究は、当時の多くの研究者が目指していた文化史的研究から離れていくことになりました。

これは、あくまでも私見ですが、もともと、鈴木先生のような研究スタンスをお持ちの方は、ある地域・時期の土器型式の編年的研究には向かなかったのではないか、と思っっています。編年研究から視点をずらした、施文工程の論文やデザインシス

テムの論文が、高い評価を受けることになったのは、そこにきて、先生の土器研究における理論的側面の整理と、実際の資料の分析方法が、車の両輪としてしっかりと組み合うようになってきたからなのではないかと考えます。こうした点からも、個々の考古資料をめぐる、その分析方法、そして分析結果をもとに歴史を語るための理論的基盤を重視する鈴木考古学の特徴の一端を読み取ることができるわけです。

#### 四・鈴木先生の研究の論理展開

さて、鈴木先生の論文を読んでいると、資料の分析結果を踏まえての解釈を行う際に、論法としては帰納的な手順といましようか、つまり、客観性の高い分析を心がけ、その結果の上に議論を積み上げていくような論理展開を好まれていたように思われます。もちろん、先生は、歴史学の方法が帰納法ではないとか、演繹法は歴史学になじまないなどおっしゃっていたわけではありません。しかし、ある定立した方法や歴史解釈のようなものが一方にあり、それに対して事実を付度していくような方法が歴史学の基本的な方法ではない、と繰り返して述べられておりました。特に、先生は、論文において、論理の飛躍、つまり資料の分析結果から遊離した解釈を述べることには、注意されていたようであり、ある意味ではストイックに、ご自身の論理展開を見つめる姿勢を大切にされていたのではないかと思います。

こうした論理の展開方法は、手堅い印象を読者に与える一方

で、こじんまりとした面白みに欠けた内容になってしまいう危険性があります。事実、鈴木先生の書かれたものに対して、冒険をしていない、とか、そつなくまとめすぎ、といった意見を耳にしたことがあります。鈴木先生の論文の書き方からして、こうした評価をする人が多少いても、それ自体は不思議ではないと、私は考えます。

鈴木先生は、留学から戻られて以降、研究者以外の方々に向けた、やわらかい文章も積極的に書かれていました。とはいえ、その内容自体は、論文と大きな違いがあるわけではありません。違いは、読者を飽きさせないよう、文章の展開の仕方に意を尽くしているところだと思います。おそらく、先生がこうした文章を積極的に書かれるようになったのは、単に研究成果を研究者以外の方々に判り易く解説するというだけでなく、こうしたやわらかい文章を書くことで、ご自身の目指す論の組み立て方からくる堅苦しさを回避する術を模索されていたのではないかと想像します。先生は、硬い文章を書く学生に、よく、やわらかいものを書けと勧めておられました。私は、博物館務めが長く、嫌でも研究者以外の読者を意識した文章を書く必要があったのですが、鈴木先生には、横浜市歴史博物館のころの仕事をよくいい仕事をしていると評価していただいております。硬い論文ばかりを書いていると、飽きさせない魅力のある文章をどう書くかといったことを考える機会がなくなってしまう。鈴木先生の世代には、ほかに国學院大学の小林達雄先生や、北海道大学にいらつしやった林謙作先生という、長らく

縄文時代研究を引っ張ってきた研究者がいらつしやいます。三方を称して縄文三羽鳥などと呼ぶこともあったようです。三先生ともに、魅力のある論文・文章を書かれる方だと思います。しかし、その秘訣は、それぞれ異なつていらつしやいます。小林先生と林先生は、方向性は異なりますが、鈴木先生に比べると、最初の問題設定や解釈の部分の内容で、読者の目を引き付けることが多いように思います。どのような問題を設定して何をどのように分析するか、あるいは、ある資料の分析の結果の上にとどのような解釈を組み立てるかという点は、学問というものをご考えるかによって、研究者ごとに異なつてくるものだと考えます。林先生のように、敢えて集団や領域、社会といった難しい問題を設定し、縄文土器や集落遺跡などの細かな分析を通じて、論理的整合性の高い仮説の構築を目指すことがあつてもいいですし、小林先生のように、やはり難しい問題に対し、ネイティブアメリカンの民族誌などを積極的に取り入れて、具体的なイメージの湧く世界を語りながら説明することがあつてもいいのです。鈴木先生の書かれたものに対して冒険をしていないとのご意見をお持ちだった人は、林先生や小林先生のよいうな問題の設定、論の展開に、より魅力を感じる方だったのかも知れません。

一つ断つておきたいのですが、私はここで、どのような問題の設定、論の組み立て方が正しいのかを述べるつもりはありません。例えば、分析結果の上に積み上げられた解釈のほかに、問題提起や展望的な仮説を述べることは、論文の書き方として



決して間違つた方向ではないと思います。それは、ある程度は、自身の研究や学問をどのように考えるか、という、相対的な問題であることも忘れてはならないと思います。

ここで確認しておきたいのは、鈴木先生の学問においては、しつかりした分析結果を積み重ねていく過程が重視されているということ、そうした上に描き出される解釈も、無理をせず幅をもたせた、ストイックな論理展開を心がけていたということです。先生は、研究者以外の方々向けに書かれた文章の中で、こんな資料の分析の仕方があつたのか、と読者に思わせるような書き方をされておりますし、そうした結論を重ねていって、ある解釈の世界に到達する、論の展開の面白さに意を配っているように思います。『考古学はどんな学問か』には、そうした文章が多く含まれています。言つたもん勝ち的な大胆な仮説の提示には決して頼らない、鈴木考古学の面白さを、きつと読み取っていただけではないかと思っております。

#### 五. 完結性の高い研究

最後に、これまでの話しと重複するところもあるのですが、鈴木考古学の特徴として、研究の目的と意義を大事にされ、また方法と論理を重視されているため、一つ一つの研究が、とても奇麗にまとまっている、完結性をもっているという点を挙げたいと思います。ある研究テーマに取り組むとき、まず現状の問題を明確にし、考え抜かれた分析方法によって得られた結果を積み重ねて、問題の解決を目指すという、完結した展開を示

しているということですが。一つ一つの論文でも、曖昧にお茶を濁すような表現や、展望的な内容に大きなページを割くことはありませんでした。

先生のご研究は、その初期の目的がはっきりしている分、その目的を達成すると、研究としては一応、完成したことになります。もちろん、土器研究の例のように、だんだんと目的自体が変わってくるということもありますので、全てその最初の目的に向かつて突き進んだというわけではありませんが、先生のご研究の場合は、小さな課題の設定とそれに対する対応を積み重ねていって、やがて大きな解釈の世界を構築するというのではなく、やはり常に、研究全体としての目的と意義を強く意識されていたことは間違いないと思います。先生の奥様は、先生を称して、「とにかく完璧主義者でした」と強調されておられました。が、それも、先生の研究の組み立て方に反映しているのだと思います。

こうした研究の組み立て方も、先ほど触れました縄文三羽鳥のほかのお二人とは、随分と違っていたようです。例えば、小林達雄先生は、縄文時代というものを理解するために、あるひとつの課題の先に次の課題が次々と派生するという研究を展開されています。この言い方も誤解をされると困るのですが、小林先生には、そもそも研究が完成するというお考えはないのだと思います。そうした小林先生の考え方は、お弟子さんたちの学位論文を出版するシリーズに、未完成考古学叢書というタイトルをつけていることから窺えます。このタイトルは、決し

て若いものの研究が未完成だと言っているのではなく、「未完成的の不断の集積こそ肝要」という、小林先生の学問観を素直に表したものと思われまます。

鈴木先生は、研究人生の中で大きく研究テーマを変えたことがあり、「鈴木考古学の謎」のように言われていますが、私は、鈴木考古学の、ある明確な目的のもとに課題を設定し、分析資料と方法の検討を積み重ねながら、その課題をクリアするために突き進むという、完璧主義的な研究の組み立て方が、この謎を理解する鍵になると思っています。鈴木先生は、ご存知の通り、縄文時代の研究者から近世考古学の研究者へと、大転身を遂げたと言われます。しかし私の目から見ると、先生が研究テーマを大きく変えたのは、その一回だけではありません。大きく見て、その前に二回、同様のシフトが認められます。

先生は、卒論でアイヌのチャシを研究されて、修論で弥生時代の環濠集落を研究されています。この二つの研究は、伝播論的・文化的に捉えられていたチャシを、防塞集落が生み出され機能する社会的状況という点から捉え直そうとしたもので、一つの研究テーマの中に位置づけられるものです。その後、清水先生との貝塚調査のなかから始まった縄文土器の研究が二つ目、アメリカ留学後の貝塚研究以後の縄文時代論が三つ目、そして銭の研究を中心とした歴史考古学が四つ目になります。晩年の先生のご研究をみると、もしかすると、この後、歴史考古学をめぐるもう一つ大きなテーマへと先生の研究が移行したかも知れないな、とも想像したくなります。いずれにせよ、

縄文時代研究から近世考古学研究へという、一度ではなく、数回のテーマのシフトがあったことは間違いありません。

林先生は、鈴木先生が近世考古学を始められたころ、電話で奥様に対して、「年寄りの冷や水になるからやめさせろ」とおっしゃったそうです。林先生も、どちらかと言えば、「縄文時代をめぐる研究課題が次から次へと派生的に湧いて出る、研究の完成ということを考えない方だと思いますので、鈴木先生のテーマのシフトというものを、理解できなかったのではないのでしょうか。蛇足になりますが、この点に関しても、私はどちらの立場が正しいなどと言うつもりはありません。ただ、考古学関係の研究者全体の中では、林先生、小林先生のような方が圧倒的に多くて、鈴木先生のようなタイプはきわめて少数です。だからこそ、鈴木先生のテーマのシフトは、日本考古学界の中で驚きの目で見られたのでしょう。しかし、鈴木先生ご本人の意識の中では、それまでの研究テーマのシフトの経緯から考えても、周りが言うほど大きな抵抗はなかったのではないかと思われまます。

正直に申し上げますと、当時、私も鈴木先生の研究テーマのシフトを全く理解できませんでした。私は、鈴木先生に、自分が慶應に来るキツカケとなった縄文時代の研究をやめて欲しくなかった。私も鈴木先生の指示で、江戸の遺跡の調査に参加し、その面白さの一端を理解してましたけれども、それでも鈴木先生には、縄文時代研究の代表的研究者であり続けて欲しかったのです。そんな折に、鈴木先生の三番目の研究テーマの

集大成とも言うべき、「日本の新石器時代」という論文が『講座日本歴史』に掲載されます。鈴木先生は、その中で、縄文時代の技術・生業・人口・社会、そして時期区分などの、とても濃い内容を、無駄のない短い文章で奇麗に整理されています。私はつい最近、ある研究者と、この論文について話しをしたのですが、その方は、「最初に読んだ時には、奇麗にまとめすぎている、引っかけりなく読めてしまうことに少々物足りなさを感じた。しかし今読み返してみると、当時、こうした内容を書くことができた、研究または縄文時代観の完成度の高さを評価すべきと思うようになった。」とおっしゃっていました。この完成度の高さというものを感じさせる研究の進め方が、鈴木先生の真骨頂なのだと思います。

実は、私は、この論文を最初に読んだ時、どことなく寂しい気持ちになったのを覚えています。完成を目指さず、未完成の部分さらけ出す研究の進め方をする方の論文は、結果的にはさまざまな批判を受けることとなりますが、無意識のうちに、読者に次の展開を予感させることとなります。私が感じた寂しさは、鈴木先生には縄文時代研究者であって欲しいという気持ちが強かったところに、私の研究はこれで完成、といったようなまとまった内容を見せつけられたことと関係しているのだと思います。

おわりに

以上、鈴木考古学の特徴を、私なりに極力冷静に考えてみま

したが、大きな誤解があるかも知れないという不安は拭い去れません。ただ、本の出版、そして今日の講演会と、鈴木先生の考古学、そして鈴木先生の考古学を取り巻く状況と、改めて向き合う機会をいただいたことで、先生から学ぶべきものが見えてきたような気がしています。もちろん、私に先生の研究の組み立て方をそっくり真似ることなどできません。私は、誰が見ても未完成な考古学を進めていくタイプです。しかし、先生の研究について考えるなかで、私自身の研究の過去・現在を、少し高い位置から冷静に見ることができるようになったように思います。大きな足跡を残された方々の研究の進め方、学問に対する姿勢について考えることの意義は、単にいいところを吸収し自分のものにしていくというだけでなく、自分自身の研究を少し高い位置から見つめ直すことにもあると、遅ればせながら気がついた次第です。

さて、鈴木先生から学ぶもの、ということに話が及んだので、最後に、今回の講演を引き受けた時から、どうしてもこれだけは言いたいと思っていたことをお話しして、私の講演を終えたいと思います。

恥ずかしげもなく言いますが、私は鈴木先生を研究者として心から尊敬しております。それは、今お話してきた鈴木先生の数々の業績、そして考古学に対する姿勢によるところが大きいのですが、それだけではありません。以前、先生の奥様とお話しをしている時に、奥様から「鈴木のとこが好きですか」と聞かれたことがあります。私は、そこで、「先生のご家族の

方々を見るときの目が好きです」とお答えしました。よく世間では、仕事と家庭の両立ということが言われます。でも、私はこの言葉が嫌いです。生意気なことを言いますが、家族が自分たちの生活の一部のように仕事を受け入れていないと、私は気持ちよく仕事はできませんし、自分が一生懸命仕事するのは、そもそも家族があるからです。仕事と家庭は対立的に語るべきものではなく、二つに分けること自体できないものだと思います。私は、先生のお宅に伺って、先生のご家族の会話やお互いを見る眼差しに触れたとき、なんとも言えない感動を覚えたのです。鈴木先生は、ご家族を尊重し、対等な立場の人間として見つめ、お話しをされていました。その時、ここには仕事と家庭などというつまらない二元論はないな、と感じました。ご家族がいらつしゃつたからこそ先生の研究があるのであって、私はそこに研究者としての理想の姿を見たように思ったのです。これが私が先生から学んだものの中で、最も大切にしたいことです。

ご清聴ありがとうございます。

(民族学考古学専攻)

## 私の鈴木公雄論②

櫻井準也

はじめに

櫻井でございます。本日はこのような場で鈴木先生のお話をするといいことだと思いますが、先生と共に歩んでいらつしゃ

った諸先生、諸先輩方を差し置いて、私のような不肖の弟子がお話をさせていただくということで大変恐縮しております。本日は、鈴木先生とのお付き合い、鈴木先生の学問、鈴木先生の教育、そして歴史考古学の未来という順でお話をさせていただきます。

### 一 鈴木先生とのお付き合い

さて、先生についてお話させていただく前に、「語り部」である私と鈴木先生の関係についてまずお話をしておく必要があります。先生と私の出会いは今から二十六年前、つまり一九七九年に遡ります。この年は慶應に民族学考古学専攻が誕生した年にあたります。当時先生はその前年から港区にある伊皿子貝塚の発掘調査をされておられ、そこに参加させていただいたことが先生との最初の出会いであったと思います。私も当時はまだ学部の一年生でしたが、慶應の考古学研究会に入会しており、当然のように専攻に進む前から発掘調査に参加させていただきました。当時は同級生で現在、歴博にいる小林謙一君や栃木の佐野市教育委員会にいる出居博君と発掘現場を荒らしまわって先輩方から響感を買っていました。鈴木先生については一九七四年に雄山閣から『先史学の基礎理論』を出されたことは高校時代から存じており、私にとって当時の先生は若手の理論考古学者という近づき難い存在でした。そのとき伊皿子では先生と直接お話しすることはなかったと記憶しておりますが、専攻に入るためのガイダンスが日吉で毎年十二月に